

25 宗教改革・宗教思想史

24-9 ※西洋宗教思想史

マイスター・エックハルト (Master Eckhart 1260-1327)
 ヨハン・エックハルト (Johann Eckhart) はトーマ
 ス・アクィナスと同じくドミニカン派の聖人僧
 である。彼はネーリンゲンの中貴族の家に
 生れ、ケルン及びパグーで修業し、後にザク
 センの修道院長 (Prior) となり、またバーメン
 の司牧をも兼ね、独逸各都市に説教して回
 ると同時に僧院管理にも従事し、政治的にも卓
 越せる技術を示してゐる。彼はトランススコ
 トゥス (Blumenfelden + 1308) と時代を同じうして

居り、ボナヴェントゥーラ (Bonaventura + 1274) と
 同様に (Thomas + 1274) 等は少くとも彼の幼年
 時代には存命してゐる。當時の聖人僧の間に
 はトーマス派とスコットゥス派、即ち知能主義
 と意志主義の論争が甘であり、また彼の晩年
 にはオッカム (Occam 1314-1394) が生れ、實在論
 (Realismus) と唯名論 (Nominalismus) の論争が
 起らむとしてみえ。特に教會の方面に於ては
 一ニ八五年より一三〇三年にかけて法皇ボニ
 フチウス八世 (Bonifatius VIII) がラランヌス五

を高調し、そのものであり、
 行為慾の旺盛なるものであつて、
 力を取得せむとするものであつて、
 術的になつる傾向を有する。而して神と以て何
 事とも爲し能ふ強大なるものと見做し、
 人間界の出来事をすべて神の一回限りの個別
 的行為の表れとみるやうになり、
 二、に奇蹟
 に對する信仰が生ずる。もしかゝる流れに
 して神と人とは全く性質と異にするといふ個別
 主義の立場をとれば、
 天然に對する信仰

一、神前教組合特製

目下

一、
 神性主義なる概念を廣義に解し、
 自己と神との對立を超越し、
 神人合致の境地に立つこと
 によつて快樂を求め安心を得るといふこと
 にその本質を求むるならば、
 その中には種々な
 類型の存することか先づ
 掘目せられねばなら
 ない。次にその主なるものと
 興味がこみ入る。
 (一) (Plumianism)

神の光にふかすことによつて
 個人が神の意
 思を知るとする流れである。
 之は個別主義

る、もしくは過去の神経興奮の状態から急に
 解放せらるるといふ感じと共に、沖の幻影を見
 苦痛の感じと、^{同時}に神人合致の喜びを認識す
 る、といふのか此の類型の特色である。この
 類型の中にキリスト教に於ける婦人の *Brant-*
myetische も入れ得ると思ふ。即ち *Brant-Myetike*
 に於ては、沖の前に畏れを感じてその前にひ
 中伏し、所謂被造者感情 (*Kreatursgefühl*) を意
 識すると同時に、他に於ては沖の愛に惹き
 つけらるるのを感じ、恰も花嫁が花婿に對す

邦語

(=) 感情的神秘主義 (*Empfindungsmythologie*)
 あるひは禁欲により、或ひは舞踏や音楽に
 より、強い刺激を興へることによつてエリクスタ
 シーの状態に入り、神人合致の陶醉境を体験す
 二に入れ置く。
 立場は或ひは神秘主義の中に入れぬ方が適当
 であるかも知れぬが、説明の便宜上差當り二
 に入れ置く。
 顯れて天意を天啓するといふ立場をとれば、
 幻想的狂信 (*Wahnsinnige Fanatiker*) とする。この
 (*Wahnsinniggläubigkeit*) となり、神が幻想に於て

自己の内面に深く及有することによつて、
 その内面の暗黒を明るみに資し、之を合理的
 な原理によつて整理し、原理的なるものを窮
 極までつき進めることによつて之を越えて神
 人合致の境地に入りむとするものか之である。
 エックハルトの神性主義は以上の中の第四の
 類型に属するものであり、和性の力によつて
 自己の本源に立ち還ると同時に物の本体に接
 し、神と共にありの境涯に至らむとするもの
 であつて、此の境に於てガリンヤの形而上學と

一極滑最組合特製

る如くキリストに對して獻身的な愛を感じ
 るのである。
 (三) 自然神性主義 (Naturmystik)
 自然の事物の中に神の愛、神の榮光を感じ、
 自然を通じて神人合致の境に到らんとするの
 が此の類型の特色である。聖フランシスカ「
 吾兄弟なる山よ」 吾姉妹なる虫よ」と呼ん
 ぶときの感じ、もしくは自己を没却して大自
 然の中にひたるときの感じか之である。
 (四) 知的神性主義 (Intellektuelle Mystik)

ま	つ	の	か	て	及	こ	く	工	
を	て	で	か	て	対	こ	く	工	
自	て	で	か	て	に	こ	く	工	
由	て	で	か	て	に	こ	く	工	
に	て	で	か	て	に	こ	く	工	
し	て	で	か	て	に	こ	く	工	
て	て	で	か	て	に	こ	く	工	
創	て	で	か	て	に	こ	く	工	
造	て	で	か	て	に	こ	く	工	
的	て	で	か	て	に	こ	く	工	
な	て	で	か	て	に	こ	く	工	
ら	て	で	か	て	に	こ	く	工	
む	て	で	か	て	に	こ	く	工	
と	て	で	か	て	に	こ	く	工	
す	て	で	か	て	に	こ	く	工	
る	て	で	か	て	に	こ	く	工	
努	て	で	か	て	に	こ	く	工	
力	て	で	か	て	に	こ	く	工	
を	て	で	か	て	に	こ	く	工	
示	て	で	か	て	に	こ	く	工	

二
 工クハルトの神祕主義は、
 神と人とを對せしめ、人は神の側に屈伏
 こと無くなるといふのでなく、むしろその
 反對に、吾々の精神を高揚せしめることによつ
 て創造者たる神と被造物たる人とは未だ分る
 つかぬ神性 (Godheit) の域に到達せしむるも
 ので、人間の価値を極度に高調することによ
 って神の自由にして創造的なるか如く人間も
 まを自由にして創造的なることを示

一 標榜費組合特製

同一傾向を有するものであるか、
 如く本質を知ることによつて吾々の行為の現
 範を定め、外界の事物を理解するといふよ
 りはむしろ魂の淨福を得ることを以てその目
 標となし、到達した絶対の境地より離つて再
 り相對の世界を理解しようといふ欲望は餘り
 感じざるなり。 We do not explain the world, we
 explain it away. といふのが彼の心境であらう。

の對立を価値なきものと見做し、次いで親族
 近隣等の關係を無きものと見做してかゝる
 對立を包攝する人間との^を具体化する
 やうな立場に立ち、神と人と對立する狀況に
 於て思索を鍊つて、二の對立をも超越せる神性
 の境涯に到る。二の境地に到るためには段階
 的に過程を経過す。相等的對立の影を次に
 薄めて行くことによつて遂にはその影が見え
 なくなる。その最後の段階に於ては以前と
 は全く別な世界性質の全く異つた境地に入

してゐる。
 かゝる如き力方の目標とする境地は相對世界
 を超越して絶対の世界であり、相對世界の自
 己内容を脱却して表象なく意志なき無念無想
 の世界である。是に連する^{連する}方法は瞑想であり、
 禪の公案に於けると同様に、相對界の矛盾せ
 る命題を極度まで押し進めることによつて、
 かゝる相對的矛盾を超越し、絶対の世界に入ら
 せしめんとするものである。最初は無物質界に於
 ける吾の物と他人の物といふ如き所有關係

説き、更に私は次の如く云はう、神を存在と
 は無 (Nichts) であるとも云ひ得る。彼は之を
 エックハルトは述べてゐる。二の意味に於て神
 明瞭もしくは黒と呼ぶやうなものである」と
 であつて、神を存在と呼ぶことは、太陽を不
 上にあることは天使が小虫の上にあると同様
 を以て存在と説くのは當らな。神が存在の
 以上あることは天使が小虫の上にあると同様
 存在以上のものである。神
 こそキリスト教の伝統たる被造物感情の存す
 ると見る。神は存在と超えて居り (Gott über
 allen dem Sein) 存在以上のものである。神
 を以て存在と説くのは當らな。神が存在の
 以上あることは天使が小虫の上にあると同様
 存在以上のものである。神

であつて、神は存在と超えて居り (Gott über
 allen dem Sein) 存在以上のものである。神
 を以て存在と説くのは當らな。神が存在の
 以上あることは天使が小虫の上にあると同様
 存在以上のものである。神
 こそキリスト教の伝統たる被造物感情の存す
 ると見る。神は存在と超えて居り (Gott über
 allen dem Sein) 存在以上のものである。神
 を以て存在と説くのは當らな。神が存在の
 以上あることは天使が小虫の上にあると同様
 存在以上のものである。神

エックハルトの神学

相対的対立を捨無し

人間が自らを無にし

神が凡そなり存在

謙下することによつて

神が凡そなり存在

かくて

地に於て体験せられると二つの意識を越え
 自我がある。かゝる自我をエックハルトは「認識
 せざる認識 (unbegriffene Erkenntnis)」とも呼
 んでゐる。
 かく考へ来ればエックハルトの無念無想とは、
 消極的に邪念妄想を除去することによつて生
 ずるものではなく、むしろ積極的にありゆる
 観念、意志、欲望等を一臈に押し込めること
 によつて生ずるものである。従つてその臈は
 ありゆる観念の中に含んで充満 (voll) であつ

一種消費組合特製

我 (Unbegreifbar sein) であり、神人合致の境
 水は非合理的な、概念を以ては捉み得ざる自
 介別を容れざるものと云はねばならぬ。
 は存在を越えたる非存在であり、相対的思慮
 あるものであるか、エックハルトの云ふ非存在
 存在と對立する空虚は存在と同一平面に
 に於ける非存在は存在と對立する空虚にけり
 (sein) である」と云つてゐるが、かゝる意味
 ものである。神は存在を越えたる非存在 (Nicht-
 なることは真ではない。神は無限に偉大なる
 ものである。神は存在を越えたる非存在

識作用とは異なるものであり、隠された意識は時向空間を超越したものであり、分別的意識の認識を蔽い隠してぬる。真の認識たる「火花」感覺的もしくは悟性的な知識があり、之が真吾々の魂には外界の事物に対する認識、即ち「*fuhrerlos, illusorischer Erkenntnis*」があり、これは永久に消滅するとはないが、この外に吾々の魂には超感覺的認識たる「火花」(即ち *fuhrerlos, illusorischer Erkenntnis*) があり、リストが述べたものであり、と云してぬる。二の身へを彼は次の如く説明してぬる。即ち、吾々の魂には超感覺的認識たる「火花」(即ち *fuhrerlos, illusorischer Erkenntnis*) があり、これは永久に消滅するとはないが、この外に吾々の魂には外界の事物に対する認識、即ち「*fuhrerlos, illusorischer Erkenntnis*」があり、これは時向空間を超越したものであり、分別的意識作用とは異なるものであり、隠された意識

この空虚ではない。この真は無より有を生じしめるものと、この神の言葉 (*Gelesung*) に相當するものであるが、更に神の言葉の背後に潜む神をも中に含んだものと云ひ得るのである。此の真はあらゆるものを創造する可能性 (*Möglichkeit*) である。これが完全に顯れる場合にはキリストとなり、不完全に顯れる場合には人間となる。故にエックハルトは、吾々が邪念を断つて心の火花 (*Funkenlein*) に接するとは、吾々にキ

Schellin) に対して自己自身 (Selbst) とするもの
 である。所有・財産・親族・友人・愛・感覚
 知識・行為等は異なる二の相對界の自我性に關
 係するものであるから、自我は之等のものに
 對する關心を断絶し、自我性が自由になるに
 によりつて初めその根柢に存する「火花」
 自己自身に顯れ、在來の相對界の事物が全
 く異なる光の下に見ることか出來、之に於
 て眞の認識に達し得る。かゝる境地に立つも
 のは所謂新人 (homo novus) である。在來

一般 (verlogenen Begriffsein) といふ
 は魂の中の魂 (Seele in der Seele) とも名付くべ
 きものである。しがしなからそのは相對界に
 於ける思慮乃至は意志と離れ別々に存在する
 ものではなく、むしろ之等の諸機能の根柢に
 潜みそれを支へてぬるものである。「火花」は
 しては思慮や意志は生じない。のみつて、後
 者は前者の不完成なる顯れとも見るべきもの
 である。この魂の根柢 (Seelegrund) とする「火花」
 は神と同伴のものであり、相對界の自我性

言語を絶へた世界に到る過程は、前述の如く
 思索を何処までも押し進めることによつて之
 を超えんとするものである。二の意味に於て
 エッハルトの方向は術^能處^くまで、スコラ階學⁽
Philosophie)の傳統の下にある。その意圖する
 とは、これは本末超越せらる可き概念を積み立て
 て、しかもその概念を超えんとするにある。
 恰もゴッテの建築に於て、素材は精神的內容
 の表現の手段として用ひうれ、云は^い精神^の用^化
 せら^れゆることによつてそれ自らを超えぬ^はぬ^おぬ^お

の自己とは全然異なる神と同體のものである。
 以上^の如くエッハルトは説いておるが、彼は
 かくの如く人間を神にまで高め得る可能性を
 認めつゝも、尚且つキリスト教の傳統の中に
 止り、かゝる境地に立つことを以て單なる自
 己の解脱^の神^に對^する奉仕^にあると
 見做しておるのである。
 エッハルトの云ふ無念無想の世界は絶対的
 世界であり、相對界の言語を以てしては説き
 得ざる所謂不立文字の世界であるが、かくの

統	一	ある	生活	が	形	め	ら	れ、	そ	れ	に	よ	つ	て	自	己
の	行	為	と	精	神	と	の	統	一	(Einheit	des	Wissens	Wirk-		
aus	und	Wahrheit)	が	生	ま	る	こ	と	神	を	思	ふ	こ			
と	ま	す	ま	す	真	面	目	に	な	り	神	と	自	己	と	の
が	明	白	に	知	ら	れ、	神	の	み	が	自	己	の	救	済	と
と	の	根	源	で	あ	る	こ	と	加	明	か	に	な	つ	て	く
飽	く	ま	で	徹	底	的	な	エ	ッ	ク	ハ	ル	ト	の	態	度
に	神	と	共	に	あ	つ	て	淨	福	を	味	は	ぶ	の	境	地
ニ	と	を	許	さ	な	い。	常	に	神	と	共	に	あ	り	と	い
と	は、	者	々	の	一	擧	手	一	投	足	が	神	の	心	に	よ
																つ
																て



貫	か	れ	こ	ぬ	る	こ	と	で	な	け	れ	は	な	る	な	い。
神	に	触	れ	る	こ	と	に	對	し	て	感	ず	る	こ	と	の
と	歡	喜	と	は、	未	だ	神	と	對	立	し	て	自	己	を	樂
し	め	る	こ	と	の	祈	念	な	り	と	見	做	し、	そ	こ	に
る	こ	と	を	以	て	滿	足	と	見	做	し、	か	く	て	自	己
を	無	條	件	に	神	の	意	思	に	服	従	せ	し	め、	神	の
を	つ	て	行	為	す	る	こ	と	に	よ	り、	神	の	正	義	を
す	る	こ	と	が	要	請	せ	ら	れ	る	の	で	あ	る。		
エ	ッ	ク	ハ	ル	ト	は	更	に	進	ん	で、	個	の	意	思	行
か	神	と	合	致	す	る	の	み	な	ら	ず、	存	在	(sein)	と

如く	解さるべき	いさひあらう。	即ち、	神が	吾々に	い
此	と	し給う	と	の	記	ある
凡	この	力を	以て、	唯一	の	力なる
神	は	神	自ら	である。	神	は
唯一	の	力	か	興へ	ら	れる
為	である。	唯	は	唯一	の	力
天上	に	於	ても	地上	に	於
也	に	於	ても	地上	に	於
人	が	それ	によ	つて	喜	悦
は	人	が	それ	によ	つて	喜
喜	悦	せ	む	か	為	す
は	な	い				
而	上	學	と	建	設	し
得	る	所	以	は、		
か	ら	る	信	仰	に	加
ふ	に	次	に	述	べ	る
か	ら	如	き	確	信	と
彼	が	有	し	て		
ぬ	に	よ	る			
神	が	人	に	力		
(
興						
ふ						
の						

中	る。	彼	の	体	験	せ	る	神	は、	偉	大	に	し	て	尊	嚴	で
あり、	正	義	に	し	て	神	聖	で	あり、	同	時	に	ま	た	惜	惠	
み	深	く	し	て	惜	み	る	く	興	へ	愛	す	る	と	こ	の	神
ある。	人	は	之	を、	安	息	に	満	ち	て	信	仰	と、	愛	と、		
悔	悔	に	よ	る	帰	依	と、	謙	遜	と、	服	従	と	に	よ	つ	て
受	け	と	る。	此	の	意	味	は	後	の	ル	イ	タ	と	方	向	
を	同	じ	う	す	る	も	の	こ	と	あり、	確	實	に	神	を	体	得
こ	こ	と	に	よ	つ	て、	安	ん	じ	て	神	意	を	行	ふ	と	い
こ	こ	に	両	角	の	根	本	的	特	色	が	存	在	す	る。		
か	ら	る	信	仰	と	加	へ	る	作		彼	が	神	性	主	義	の
形																	

Hen)	王 (König)	父 (Vater)	審判者 (Richter)
るに	「社會の事實」	より名稱を借りて、	主
るで	ありう。	ギリヤ主義に於ては、	神を名付く
ト教	に於ける	工外ヤ的要素と見る	ことか出来
る	ギリヤ的傾向と	するならば、	後者はキリス
傾向	との二かある。	前者をキリス	ト教に於け
存在	を見出し、	する傾向と、	動きを見出し、
度	いと思ふ。	キリス	ト教には物の本質を
統	的の中核に於て	如何なる地位に	キリス
統	的の付随	の非立	つての
度	いと思ふ。	キリス	ト教には物の本質を

一 種 消 費 組 合 特 製

し得る	といふ確信	を彼は持つ	こゝろに
以、	吾々の中	に於ける	キリス
を	顕在化	せしめる	ことによつて
は	さび	である。	潜在的
の	いは	なり、	といふ
素	質	あり、	總じて
中	るこ	とによつて	神意に
初	は	不分明	ではある
意	によつて	為される	の
自	ら	を	天啓

等と呼び、二元的に人と人との関係に類推せ
 こめて居へておるに對して、エカヤ主義的傾
 向を推し進めて神を動的に把握すべし。神は
 生の力 (Kraft als Lebens) 、「^光生と死」
 (Lebt und Leben)」と見られ、神の力が働いて
 個人の生活の中に入り込むと考へらる。エカ
 ヲハルトは後者のエカヤ主義的傾向をより多
 く有するものであるが、彼はスエラ哲學の傳
 統の中にあつて、存在 (Sein) なる概念――
 オリソ主義によつて、目に見ゆる事物を基礎

とし、^{しこ}造ら^れた^とし
 と^も存在^{する}概念――によつて神を捉へらる
 とし、^無 (Nichts) 等の言葉を用ひざるを得な
 かつと。
 また本来キリスト教の中には、神を超越的
 に見る者へと、之を内在的に見る者へとが兩
 立しこぬる。原始キリスト教に於ける神の心
 に對する觀念に於ても、一に於て最後の審
 判後に於ける神の國が考へられこぬるに對し、
 他方に於ては、神の御心は等の中にあり (Gott



に	は	者	認	ニ	の	人	に	見	真
對	當	と	め	に	み	の	神	做	に
す	紀	見	を	彼	か	對	を	し	ま
る	二	做	所	か	宗	立	有	て	で
信	の	す	以	神	教	を	す	一	進
仰	こ	に	加	人	の	も	も	神	め
を	と	到	あ	の	極	撰	の	を	ば
不	は	中	る	對	地	無	地	信	、
認	二	は	か	立	に	し	に	加	神
し	の	神	、	以	刻	と	は	す	と
と	こ	の	ニ	別	達	二	な	し	人
見	と	影	は	に	せ	と	二	と	と
る	は	の	エ	神	る	に	に	三	對
心	ッ	薄	ッ	性	も	生	ら	の	立
き	ハ	水	ク	(の	き	ら	人	せ
で	ル	二	ハ	神	ど	る	る	は	る
け	ト	ど	ル	性	あ	も	る	未	た
は	カ	と	ト)	る	の	も	だ	本
な	カ	保	カ	を	こ	の	の	の	と
ま	神	持	神	を	こ	の	の	と	

一橋藩組合特製

リ	エ	義	自	か	に	の	く	於
と	ッ	の	の	つ	立	ど	る	け
い	ク	中	罪	二	つ	あ	な	る
ふ	ハ	に	意	に	つ	つ	つ	る
止	ル	充	識	行	と	と	と	る
ら	ト	分	も	為	す	に	に	る
わ	の	調	し	に	と	不	可	る
し	の	和	く	於	い	知	の	境
て	如	し	は	て	ふ	の	地	ま
神	く	取	被	は	や	境	境	ど
と	、	り	造	キ	う	界	界	突
同	自	入	者	リ	も	の	入	入
体	己	此	感	ス	の	に	い	得
に	が	得	情	ト	な	な	得	と
な	單	ま	を	教	う	う	と	
る	に	か	彼	独	な	な		
と	神	つ	の		う	う		
い	と	と	神		な	な		
ふ	共	憾	秘		う	う		
	に		主		な	な		
	あ				な	な		

又は此の問題に對して「等しさものは等しさ
 ものによつてのみ認識せられる」と述べて
 認識が成立するのは主観と客観との間に
 相等性 (Aequitas) が存することによると述
 べ、
 神祕家にとつては認識が成立する所
 以は主観と客観との同一性 (Identitas) に基く
 るのである。眞の認識とは主観と客観との根
 源的同一性を洞察することである。「私は私
 の認識するところのもののみあり、存在と認識
 とは同一である」といふことは神祕家独自の

彼はギリヤ人の如く
 人間の行為の規範を
 行儀の規範に見ゆる
 ものとして浮い上らせず、
 むしろ行為の環境地
 を自らを以て行為の
 規範としてある。

見解であると言はわはるうぬ。
 かくの如くエックハルトは吾々の世
 界の本体を力動と見るところから、
 世界の構造、および^{世界}に於ける人間の地位
 等がギリヤ人に於けるか如く繪となつて現れ
 て来ないのは當然である。彼は形あるものは
 存在を見下して、形なき行(業)に存在性を
 認め、彼は次の如く述べてゐる。「何故に汝
 は生きるか、と生に向つて何々回尋ねても、
 吾は生きむが爲に生きるのだから」との答

ものである。經驗的自叙の根柢に横はる自己
 自身 (Self) と、世界の根柢に存する神とは
 神能性 (Theological) に於ては、一である。
 かりやに於ては、 π の底に潜むもの、万物の
 に於て見、個々の事物の調和ある配置に於て
 見ると及し、エックハルトは之を、即ち神の根柢 時間的に展
 開せうかと相對零の凡てを中に含むものに於
 て見る。故に魂の根柢は平靜、不動、不
 変なるにもかかはらず、その可能性が現実と
 なるとき、相對的世界の對立する思考概念、

一 精神發展合特製

を成せるために汝等の表にはさうき、汝等と
 し、その 志望を以て、業を行はしめ給へばなり
 と述べておる如く、自己の中に高きものを認
 めつ、もそれを又さし、かとして自己よりか
 る他者に基くものとなし、その前に己を無に
 し、これに依し、 π によるのである。エックハ
 ルトに於ては何れも個別主義の根柢、神論的
 である。神論にはさうさうの可能
 性の領域に於ては、神人合一しておることも、現
 実性の領域に於ては飽くまで神人は對立せる

魂の根柢「は單に真理性と確実性の根源なるのみならず」

願望、感動、欲望等が生じ、神と人との對立を生ずる。その故にエックハルトは「吾々の生活は神より出でまゝにこれに歸る」と述べたのである。吾々の認識は「魂の根柢」の判断あることによつて初めて真となり、吾々の行為は「魂の根柢」の意志あることによつて正しくせうとする。二に及ぶこの真理性 (Wahrheit) と確実性 (Sicherheit) の根源がある。まことに倫理的行為の原動力となつて外に向つて働かざる。吾々が理想の中を受け入れねばならない。

を、吾々は愛の中に入出す。神を見るに止らねしと神になつて働くのでなければならぬ。二にエックハルトの神祕主義がインドの如くとも異なる所以が明かになると思ふ。インドに於ては、世界は逃避するべきもの、否定されるべきもの、涅槃の世界とは全く對立するものである。人は死後因縁を脱して之に入り得る。現世的行為は非道徳的 (immoral) ではないが道徳には無関係であるから、

(Anastasi) である。然るにエックハルトに於ては、
 現世に於て神と共にあることが即ち淨土であ
 り、ゆゑに上つて一々の行為は価値を得る。
 人が真の認識を得れば凡ての被造物は光明に
 満ち、世界は「凡ての善行に於ける喜ばしさ
 行為の舞台 (Schauplatz) である。『
 garten (Garten)』となる。『私の常に云ふやう
 に、人は来世に於て来世に於けると同様に
 の完全さを以て神を見ることか出来、来世に
 於けると全く同様に淨福をり得る。』と
 述べた。



以上は云はば裏口よりエックハルトの体験を
 理解せむとする試みであるが、彼が豊かな
 体験を如何にしてスコラ哲學の傳統的概念の
 中に感り込み、その体系を作り上げ之を次
 に観察し度いと思ふ。

不性格を有するものかあるか 是を更に否定
 するところの伸性は所謂否定の否定であつて、
 絶対^の内容の充實した、しかも無差別的な
 實在であり、大極とも名付くべきものである。
 エッハルトは是を「生産される自然」(Natur
 naturste Natur) と名付け、有限的に定義し
 得る。像を持つところの「生産せられた自
 然」(geschaffte Natur) と區別してゐる。
 伸性がその自身を天啓し、自己自身を認識
 するところには、父 (Vater) ・ 子 (Sohn) ・ 聖霊

一橋大学組合特設

吾々の思索の到達し得る最上のものは、
 エッハルトによれば神性 (Gottheit) である。伸
 性は實在な自身であるから、有限なる存在
 を相互に區別するために作り出た概念を用ひ
 てその積極的内容を表示することは不可能で
 ある。伸性は、概念を以てしては単に有限な
 らざるものとして消極的に規定し得るのみで
 あるから、さすればそれは空虚 (Leeres) であ
 りない。蓋し有限なるものは實在の否定とい

四

エッハルトの思想

(*Wettersen Geist*) の三人格が發生する。即ち、
 神性が自己自身の中に反着すると云ふ、乃至
 は萬物を中に包む言葉を發すると云ふに於て
 父と子が共に相對立する。父と子は共に神
 性の完全なる天啓であつて、兩者の間に上下、
 被造者・造者の關係はない。前者は後者なく
 しは存在せず、また後者は前者なくしは
 存在しない。二の父と子との愛、それが即ち
 聖靈である。聖靈は「*Πατρὸς ἑκείνου*」の變形
 と云ふ心さきもので、事物を動かして、引きつ



け合ふ力の具体化と見るべきである。絶對者
 が自己自らを天啓する發生的行為は、その一
 回父と子が發生する時にのみ起るもので、
 且つ永久に且つ不斷に行はれぬ。有限的
 被造物もまた子と同じく絶對者の天啓があり、
 その本質の顯れであり、その天啓が不
 充分に行はれぬ。有限である。有限である
 が、とにかく其本質に於て神性である。其に
 於て父もしくは子と異ると云ふは、
 この處に於てエウハルトの學説はトマス

を含み有限である。と見做してゐる。トーマ
 スはギリヤ式に靜的に個々の存在する事物よ
 り出發してそのイデオを求めると二三から、
 イデオと以て具體的形態をもつと永久不變の
 存在に認め、之に對して個物は無価値なもの
 とするに及し、エウクレトは個々の被造物を
 發生する力を存へてそのより出發してゐる
 爲に、換言すれば存在 (Existence) の立場からい
 はさく現實性 (Actualität) の立場より出發し
 てゐる爲に、各個の事物はその個性といふ

派のそれと異つてゐる。トーマスによれば、
 被造物は神と異なる存在 (esse) を有し、神と對
 立するものであり、個々の被造物と土台とし
 て作られたる概念のみが本質 (essentia) であ
 りて神性と有して居り、個々の事物は二の理
 念的系列に組み込まれることによつてのみ実
 在性を獲得する。之に及しエウクレトは、被
 造物は神性と異なる別の存在を有するもので
 はなく、神性の直接の被造物となく、その
 不完全なる發露であるとして二三からして非存在

面からみると非存在であり無価値なるもので
 あるが、神性の顕れといふ側面から見れば永
 遠なる価値を有するものである。かくして自
 然の世界は永久の生成でありながら、なほ且
 つ存在するものであり得る。
 トーマス派は概念实在論 (Repräsentationismus)
 の立場に立つものであり、個々の事物の实在
 を認めればぬるが、^{トーマス派はこれ} 眞の实在は個々のもの、
 上に築き上げられし表象し得る観念 (Idee) (false idea) のみであり、この観念は個物全

体を包んでぬるものではない。スコトマス派
 もトーマス派と同じく实在論をとり、同じく
 イデアにのみ真理は存するとなしこなるが、
 トーマス派の如くイデアは表象せらるるもの
 観念はよく、表象せらるる生成発展する
 意志である。しかしながら、意志も個物
 全体に含まぬ真に於てはトーマス派と異ると
 ころはない。之に及してエッセルトは個々の
 事物の实在性を認めつゝ、しかも同時に之等
 總てを包みとする絶対の实在を求め、トーマ

かその中を自覚してはゐる。自然の事物は神の声を聞くことが出来ず、独り人間の魂のみか神の映像 (Eindrücke) であつて自らを啓蒙し、自らを認識する力を有する。之によつて人間の内の中に主観と客観の分裂が生じ、まゝに水を結合する力が生ずる。心は神性と同様に潜在的なる力 (Potenz) であるが、之が表面に顕れるところは記憶 (Gedächtnis)、理性 (Vernunft)、意志 (Wille) が生ずる。之が信仰 (Glaube)、希望 (Hoffnung)、愛 (Liebe) の対立



であり、父 (Vater)、子 (Sohn)、聖霊 (Heiliger Geist) の対立に相應する。その心理学的分析は不明。魂はこの三者を超越して、^{其者を}中に含めるものであり、エウヘリトは之を火花 (Funke) ますは小火花 (Fünklein) と名付けてゐる。その本質は像でもなく、また働かざるものか、^{その}知によつて得るものが、意志によつて捉へらる、^{その}之等凡てを盡すところ、神性の天啓ありつて初めて獲得せられる。神性から父、子、聖霊が榮生すると同様に、神性の天啓によつて

ハルトはかゝる心境を次の如く述べてゐる。
 「沈黙のさ中に天の御言葉の如く述べらるる。
 (Mit dem im Schweigen ward zu mir das him-
 melische Wort gesprochen.)」
 吾々の言葉を以て云へば、吾々の心中に知
 の働きのよる像がなくなり、意志の働きのよ
 る努力がなくなつた無念無想の時に神人が一
 致するのであるか、之は初めから知や意志と
 働かせぬと二の無知、無意志によつて得ら
 れるののではない。もともと、自己を天に
 近づけしめようとする

一 概論 組合特製

吾々に吾々自らの本質が明かにせらるる。彼
 の言葉を借りれば、「神性が自らを完全に、
 しかも像をなしに知る時父は子を生む。之と同
 様に吾々もまた神性を解するときに神の子と
 なり、キリストが吾等の中に生まれ、神と同
 地位にまで昇るのである。」二の場合に此の
 リとも観念の像が心の中に存し、或いはまた
 意志が存するやうな真の合一に到ることは出
 来ないのであつて、像なく意志なきに到つて
 初めて神人の一致により法樂が生ずる。エ、ク



な	な	た	無	を	説	の	や	も	め
る	く、	み	限	妨	い	統	う	の	る
事	吾	る	な	げ	こ	の	に	と	こ
物	々	に	る	こ	ね	申	は	と	と
に	の	對	に	こ	る。	に	説	に	よ
向	意	し	對	も	。 彼	止	い	よ	つ
け	界	て	し	の	に	り	て	つ	て
ら	が	人	て	は	よ	己	居	法	樂
れ	神	か	人	罪	れ	を	ら	の	境
を	に	個	か	あ	ば	無	ず	地	に
二	向	あ	有	る	。 神	に	飽	列	ら
に	け	ニ	限	と	性	す	く	ら	い
止	ら	と	あ	は	に	る	ま	い	と
つ	れ	は	り	。 罪	對	こ	び	と	い
て	た	神	。 神	は	す	の	キ	の	こ
快	し	が	が	。 神	る	の	リ	の	こ
樂	こ	總	總	か	洞	徳	ス	の	こ
を	有	て	て	か	察	を	ト	の	こ
感	限	は	は	か			教		こ



こ	を	と	神	と	か	す	る	こ	こ
る	盡	の	よ	云	更	る。	こ	こ	こ
に	す	意	り	は	に	。 無	に	に	に
あ	こ	味	離	ね	統	念	同	に	に
ら	と	に	れ	ば	一	無	一	に	に
た	に	於	ら	な	す	念	と	に	に
し	よ	て	る	ら	る	無	い	に	に
て	つ	。 其	も	ぬ。	も	想	ふ	に	に
寧	こ	の	の	神	の	の	け	に	に
ろ	の	み	か	へ	復	境	て	は	に
自	み	為	再	の	歸	は	不	充	分
己	為	い	び	復	は	全	分	で	あ
を	遂	遂	神	歸	全	人	と	あ	り
言	げ	げ	に	は	格	格	。 一	度	。 一
調	ら	ら	復	。 自	の	の	。 一	度	。 一
し	れ	れ	帰	己	力	の	。 一	度	。 一
發	る。	る。	す	を	の	の	。 一	度	。 一
展			る	捨	の	の	。 一	度	。 一
せ			も		の	の	。 一	度	。 一
し			の		の	の	。 一	度	。 一

所以である。

二の実は多少彼の本来の傾向と矛盾してゐる。と云ふのであつて、前述の如く彼は魂を含蓄的力と考へ、その中に現実の顕れと対立をとり、その対立を再び精神の集中によつて超越せんとするものであるから、個々のものに向けるべき意志を消極的に取り去るのことはなく、むしろ積極的に之を促進し、其間に調和を求めるといふ方向に向くべきであると思ふ。中世一般の傾向として、現世生活と軽視し、現世生

たるといふことである。これは人間が自由意志を有する結果であつて、人間の墮落 (Fälligkeit) に基くものである。意志が特定の有限なるものに向けられてゐる間は、神が吾々の魂の中に入り来る余地がない。故に做しは、有限なるものからかうの復帰 (Abkehr von dem Endlichen) により、神が自己の魂の中に入り来る余地を作ることによつてのみ得られる。二小彼が「離別 (Abgeschiedenheit)」放棄 (Aufhebung) を以て敬虔の極致と見做した

活を以て罪の生活と見做す者へは強く、オカ
 4の如き意志を尊重するもので、之を直さ
 に伸意に服せしめ、之を以て理想とし、
 子。エックハルトもまたその傳統に倣ひ、人間
 の墮落の身へを持ち来り、自由意志を否認す
 るに到つたもので、彼の本来の傾向を徹底せ
 しめ得なかつたものと云はねばならぬ。
 かくの如くエックハルトは、自己の體驗を基
 調とし、その上にスコラ哲學の概念を用ひて
 社嚴な体系を築き上げ、動きの間に繪を見る



といふ独逸本来の傾向を示してゐる。しかし
 ながら前述の如く、彼の思索は、先づ個人を「
 人間一般」の位置にまで高め、「人間一般」
 と神との關係を問題とし、^格格子のひびつて、
 未だ個体として、人間を考察するほど自己意
 識が明瞭でないといひ得る。彼は未だ中世の
 人たるを免れぬ。個体として人間を見、個
 人と神との關係を追究し、そのか、他ならぬマ
 ンチン、ルイタリアである。エックハルトの學は
 口於ては、存在(Existenz)なる靜的なやりとり

他件の向
に於ても
の概念と
用ひた
何事かの支障
を及ぼさか

概念を用ひて、本来動的な現象 (Wirklichkeit) を示さんとし、
二に無理があると思ふ